ホ 2
1098
1

門 加2
1098
1-2

明治廿七年 第二版 十月發行

本居春庭 著
清水濱臣 增補
岡本保孝 標註

詞八衢

增補
標註

加部嚴夫 校訂
大和田建樹 再訂

版權所有

江島氏出版

正二位西三條公題字

三信序

言葉乃やちまた序

哥（ウタ）よりも美しかく人をうごかすものなくて
つゝしまるべきなり山とやまとの
詞（コトバ）の道ふかきつゝしみそはつかの書（フミ）
どもの文（フミ）よまん後詠とまをかの心をこゝ
やうふかくえはてゝ不幸後のこゝろゝ辞（コトバ）乃
そたゝきおどろかの世乃あらひさまの移変

ぶろふるけまつ。やびうなるきたなでぷうくこゐ
ゐうよあちらくはちでパえけるたしけまで
なうう。うまゐ河乃曼ひやてちいゆつみ十連
のこゑのたてぬきよりて。ぷー考ふべきなり。
もくらの五十連乃音とつゐ八人乃ゐよ祭
如れ音乃かこを祭をたてたくさて
ふまにくぷらはよのまふくゆさうわと

たしひてあ山あまを八。詩のまにくゆこよ
ゆうの暫。曼ゆ持をせくぐ考へちるるに。
やてゐぐるこをを形。けやくくを
くゆるわなるけをそはをふを彼のく
のくかぷ邢ぼるひのけぐりをちぐゆ。言の
乃びちぐみ。云ふ。ぐ彼ぐ。自他のつひぐ月
なぐ。ふこの徑偉れちぐくよひよりせく。

つくさんとなげるよりてかきうなれ言のたより
はしてゝぶき詞ゝをかあふ俚言のうけゝゆゝ。
露をかゝもうゝぶれまゝぶ俗ことなくあ雅
つゝうるゝはきバ此八巻ふるきまゝへゝまゝる。詞
は活用の四段ゝわゝ。一段ゝようぎゝ上中の二
段。きゝ力二段ゝをゝて。四種ふゝるゝいゝも。
もはゝ此段ゝゝゝ考へはゝぶゝまゝもゝぶ

るゝこゝゝ。かゝてゝの假字ゝゝひの書。てゝ不
きゝ段の書ゝゝ。ゝたゝぐ昭考へゝあゝゝゝ待て、
今ハむゝはゝゝあゝゝ耳ゝも取ゝゝ此をこの
言葉のゝてゝきゝゝゝ事ハいまゝ書て
ありぎはゝくゝる人をなくゝをゝくゝまゝゝる書も
見てゝはゝゝ後バ。ゝてゝび鈴屋大人乃真子
つゝ此本居大人とゝあゆる。春庭君。第一

若人かうして。此二巻（フタマキ）にあらはして出板し
なれ。これぞこの。言葉の道のあらはやこの
あるをしらくまなびたゞれべき。いみじき
まる信文よりはかりつるれかくいふは。文化三年
五月十三日。尾張（ヲハリノ）植松有信（ウエマツノアリノブ）。

言霊の幸ふ國。ことたまのたすくる國と歌
にもよみたれば。げにいふもさらなれどあらてはた
古宗郎の都のころよりぞ。山背のみやことなりて
後ぞ。あはし此程をこそ。その道を正しくまち
まなびて。いましのあふみたゞしきことをなのみし
うしてことを朝夷の御稜威武門よりつかって保元
平治のころまで。元亀天正のころまで。よろつの
みだれまよひれて。文学にあつかるさてはすべてあ

らぬるぶみをうつろひりて。永園の道てふものは。いまさいふ所のそのかたとたゞ呼しるものなれば。しるべさだめて歌をもむ道のこゝろをもたてるこゝろつ。屋ーほくもあちこちはまなる海のうらなれてそなりやーかゝるをうるへいて。矢さいふ所。はしみのはのうまんすーさいふ物はなりてる。八束脛むれさるなるひらをとゝとちうるかゝる歌をこゝはーるなと書とゝのてりてすれ

さりしはなやーそゝらやしくぐそらーとる寺
くしてでれびてこゝの國と名なるなるこゝ
とこゝそいふあるれ。そこはあれと世ゝちゆゝり
きるゝうひてひゝれてこゝろそのこゝ有てーさまち
みるれめをこゝるめこゝろのーせきくゝのなな
こゝろまてさゝひこゝるをゝさりとゝるこゝろさゝゝさゝ
はいこゝふくやーきこゝゝゝなゝちゝやゝ。てみ前四東
唐加茂真淵。本居宣長なゝこゝ云大人ゝ多ちゝ世こゝいて

られ一今の古事一ものしるしの道ならず一そもそも
うた。そもそもの道のやうとくに用ひてみるべきを
はさめ。たゞうるをもてきれしことのうつるゆゑに
ひめもすもれはまつ一今。其後てのちたゞ学のかぎりを
のうらなめ。さそもある人こと。なほくしてせうきて
そうらく人ものゆゑまもれうすぐそれ世の本居春庭
おもひ人は。宣長翁の書のてうて。古事記のも
ことはの道のいとくゆゑひえて。学みとめなく

あらはされうゆゑ。それの初の御はは
いとめてうもうして。一度世をいて一その久く
その歌うも。撃坐右ものあて事の月夫。賞こなむ
ものはやいる。されものこふひうゆく世て
なりてはさきのひ人のの思頼をうりて事の月へ
の道のひらけて一井ひえる学ゆくなう
はまて。清水清五。宣本保春なきのひくしのう
えれをひうひ人。そのうのうえはをうるを

てうよりてうられ。やてうら增補標注謌の八衢
なり。それひと卷は俗説の誤をはらひて。まつ明よ
實を極めおくるかしなり。ことわりきしあり
て。ち情江島伊兵衛ちかのとなりたれと。あわう
きをとて拾ひて寄りていややうでをしかそうまし
板よりて。世かくうまれくしらめまと
なりをいひてひとうまりの神ことはつをを。
おなれいそたくうちうそうらはら

さうをてうるかをあらはをとひとなはい
前ケ　とせちうまはうとうされやて
ひうよみれてとてろくあるゆむねなをにあ
らね實。うまくうよそうみのまうはあれぶ
なたかしうをはそれまくねさうやまうは
制うをかそうをくやうはさうとうう博士に
ふしたまひぬという實。伊兵衛うらひてうつ
やう。ぶつれ居ようひてそれ神のをうるる

うゑは。やられのはしをなるところすゑるはまなみなどて
はるのやまし桜をゑみめでし。君がみるところのゆふ
とあるさるとは。やまれがあつかりしるところなれ
わらすといふすそしとく。たつきてゆの母せとらす。あわ
ゑしくさふとめていにし事のゆゑよしをこ
いしるして。いさのてとりわけ出られ世時そ明
治十三年二月のはじめのころ。桜のちられほころふ
いそがしきゆのまとにて

加部　厳夫

明治四十三年六月九日
江島伊兵衛氏寄贈

言葉のちまたといふ書は。さきにひもとくましくたく
なれるものにしてひとたびよにいでしよりことのほか
世の人のなにがしなにがしともてはやしてけれど後の
ことをいひわけちよ語の詞をかくてわけよいひがまぎ
れこともなくまらはれいまくめ人のこころおもしらぬるた
まひのくりくを借く世の中よありやし。いふことしてふ寄れと
なりともいひあらしまさび中世ふたらすぬこふさくあるぬことれ
ききての活(ハタラキ)よらはわざになむいはきまれさらは神代よりその

ばかりまでゐるまく今は世ふつうれまぐうばをかうること
なくいろいかをたづひやまるらにをそれこをわるずその
ちはきこえがてきもはやあ行ぢ一文字といへばをみだり
ふてづきみぢのよくてくなどもゑくはかりうにはしひふを
ばぶこばふハいるどなる葉かくてつやくの人をおのばのわど
まへて用ひたづるあやをなかりばうば後の世となりくを
ゑうくふうばひゆきばば語ることはとおばくなりぬるを世よ
をこうばむる人をなくらかくあばばしふ書をはうえ空まに
つやくいる表だをあ面をるうをはをばかくなる楽をにかれ
かくばばもれまなばむ人はつやゑ乃たばくうばふをまき

をうくいひびくかくかりてそれをきわざかれをいうに
やをはるはひたばばしばばなやばばふのをせるひをばして往
あやまれあをはかやきをきつにばやさ行ばを欲よくよみ文章よ
くはくまる人をはのをよくこころはなるをばしはのばのう
乃もはかしゑをばの所ばうのかひくたばるこをををさくまう
ゑろばうひまはびのうをばかはてたばくしゆばうをばを
かくあやまはくをいとはばたをばを今をは人をかはをしをを
をはをををくいかりへのをはをばのをはをこれうを行ばをくをくを
くわうう志ゆうをを詞の八闇ばうもばばをるうはかはば
立ば楽ををは活ばゆかををばばををばうををおもひをゆくもの

保孝云志志き志し又志きくの活きのことハ義門の山口栞下巻に詳なり

しかあれバ道ふならはむ人てかくちまたにまよひなきをもとむ人よく
たゞちにそのまがへることをしれ
○活ハすべてつかひざまにしたがひていろいろになる中ふ四種の活あり其事下ふ委し
まづそのうちにたぐひ多くひろくつかはれてこれにならぶ
はじめつぎハ他にまがひなし次にはた 志 志き 志く 志き 志く
ごとくしらく詞のさまなりその餘のおもてにてられたるはこれによくかなふさまハつ
せらく詞を思ひわけて 志 志さ 志く 志き 志く せ そして
ハおのづから其をつかはれたるを稱せることもたゞ 加 行のみにて活かしくその餘
の行ふかくそらくたぐひ乃ものおほかれバ稱せざれども四種の中
たとへバ あ か さ た な は ま や ら わ 乃行ふわたりはたらくこと

保孝云奴琉三十三段より卅八段までこの活用なり

ごとくそのさだまりあることなりされバ四種三種あるひハ二種
ならびたる活きも類てはたらけるひろさにまどひてその由も
いまだ知られずかへりて猶ざんこれ四種乃さだまりをけがせることぞくは
しくうの類なとぞいふべし其ハ後にくはしく書しるしつ
それ餘の稱ハさらにいハ別にあるべき由なし
○四種のさだまりといふハ四段の活一段乃活中二段の活下二段乃活
此四つなり活のさまハ次にいふべし此外にこれ又中にまじりあるにつ
きされバ此事をわけさだむるにハ目なくてはたゞ類行にいれば今
かりにいへる名なり下も皆この名をもていへり
○四段の活とは か き く け と きをせ とやうに第一の音より四の音

保孝云友鏡にては四十一段より四十六段まで この活也

保孝云友鏡卅五段より四十段までこの活きなり○級鏡には四段の活きに混ぜたるよし 友鏡は分あり

保孝云友鏡卅八段より卌八段までこの活きなり 級鏡には下二段の活きに混ぜたるはあやまりと云 然れどもむと同じ段のものをあげたるなどもまた知るべし

まうで 次く四段にあかむ° あき° あく° あげ° おさむ° かし° おそ° かせ° たぐ
ちゝくといふありけり活詞かずおほくはえしらず

○一段乃活きは いる° いる°(射) きる°(着) にる° みる° など第二の音一段のうへに
てはたらくといふは いる° きる° にる° みる° のるは言をそへて活をなせる
ものそ某行の音ならず かくしもあげるたぐひそはたらきをべて一段にて
いきやかよりの外なければ此活ことは葉いとすくなし

○中二段乃活きは き° く° くる° くれ° ち° つ° つる° つれ°と第二乃音第三の
音二段にてはたらく れく° れくる° おち° おちる° おげ° おげる° おげれ° など
はたらくをいふなりくはぶられ つる つれ乃るれは一段乃活の前に
いふるかぎりこのはたらき詞をしらぼしぞ

保孝云級鏡廿四段より卅二段までこの活也 友鏡にては十八段より廿七段までこの活なり

保孝云変格はか行さ行な行ら行の四行にかぎれり 友鏡十五段より十七段までこの活なり 級文章にて き° く° くる° くれ° ぬ° ず° ぬる° ぬれ° その一言にて用をなさずれど これらはこのうちにて これをはふおいてかまへるとあげたるは変格とられまたさかうるを成れ 命せんもいでき° く° くる° くれ° は上下二段せし° す° する° すれ° は中二段よりるべし 野こ口隆云哉

○下二段の活きはく° ぐる° くれ° けよなども° また第三乃音と
四乃音との二段にてうくる° うくれ° うけ° うけよ見せを見せて
れ° 見せもとるくとつぎくるくもまるそれのるもいふ活き
上に云ふごとにたがひの活のことばいとおほかるべし

○又これ四種のほかにまたまれおそしたがひはく一活にか活ずる異なる
はたらきをかくに変格と名づけて その内にいる行乃国にかせたるを
いとれ前にて了解し

八右の圖五十音中その一行ﾆ活用して他行にうつらぬ者ヲ本行活用といひ他行にうつる者ヲ他行活用といひてわかちたりさて受掛ハ往死有居の活用をあやまれりその説音圖神解要語訣語格指掌等に詳なれば上の如く分別あるなき七種の活きさまありけれども〇く〇き〇けれどお活く者を合すればすべて八種の活用あり

〇四種の活の圖並受るてにをは

四段の活						一段の活						中二段			
飽	押	立	逢	住	納	射	着	似	干	見	居	起	落	戀	試
か	さ	た	は	ま	ら	い	き	に	ひ	み	ゐ	き	ち	ひ	み
き	し	ち	ひ	み	り										
く	す	つ	ふ	む	る	いる	きる	にる	ひる	みる	ゐる	く	つ	ふ	む
												くる	つる	ふる	むる
け	せ	て	へ	め	れ	いれ	きれ	にれ	ひれ	みれ	ゐれ	くれ	つれ	ふれ	むれ

此処四段の活と一段の活とハ切ると續くとをわきて一ツあると中二段の活下二段の活とハ二ツにわかれたり

中二段の活			下二段の活									
老	舊	率	得	受	痩	捨	兼	辨	誉	消	枯	飢
い	り	ゐ	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
ゆ	る	う	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
ゆる	るる	うる	うる	くる	する	つる	ぬる	ふる	むる	ゆる	るる	うる
ゆれ	るれ	うれ	うれ	くれ	すれ	つれ	ぬれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ	うれ

受るてにをは

此処一段の活中二段の活下二段の活ハ一ツあると四段の活ゆてハ二ツにわかれたり

かさはなく〇〇〇をハ一段の活きまじりてふくれたり

○を信て右乃活詞よりを受るてゐをとれつてをかをどこをぐく
ハつぐるびそれ大低をあげたるかり又やなりあどれごをくゆさや
えゝゆくやえゝなどきよう楽をくようをうあまさきこゆなり利
さこゆるなり楽あどゆゆゆゆるようをうくるてゐをとあどはまぐ〳〵ハ
きれば〳〵れものせざゐかなり

○四段乃活ちあ[な][や][わ]の四行ふハなゝ第一の音かさたはまら
ハそれまあてハつまご活をふさびなくバあうむあうびあうどかはむ
かさびかさどうふびうさどなどをあかかさうをやのうに
てハ活をなきばゐりその下ふうられふまはのむどどあそ
活をなきあ案ち活ち四段のうたゝきふかざれるこにて一段の活中

二段の活下二段乃活ちそれ活をなるどくくてゝれなゝけくくの才
一の音よりうくるてにををぞでどぬむまゝなどあり才二の
音きちちひみやをち用言へばどくあや葉ちうくるてふをを
ちてつけやをきむなばぬるつるゝ志のなどれやを才三乃活
くをつふむるをいるゝ詞や雅言へばどく何をれかやをりをるてふ
ををを二つをもちひて切るかをうるてにをを花をら楽
ぞきちゝさやを続くこを楽ようをうれてふををハかなようれ
をうるをどるを来才四乃音けせてへめをハをそれ活何あり受るを
ふををハむやどどなどあり

○一段乃活ハさたやらの四行ふハなゝこの活ハたゝ才二乃音乃

ちひらの ありつら
に於ける所の音に活の
なりゆうかいつる
八一段の説え思て
いか所用うな書れぬ
事り

經若ありかへとかくべ
し摘なり
撰集ろの松やとい無
れかさむてにの仮字か
るべし

いきしひみゐの音は上乃活なく四段の活乃第一乃音と二の音との
二つ乃活をかねて用言へ続くことは見えたるてにをはなし其の外なる
をかねてちかふことも図のごとし其の此音にある所をそへたる八四段
のてにをはきれ第三の音もおなじく切て調て体言へ続くとをかねて
てうくるてにをはを二つを用ふることも四段乃活に於てのみ見えたるに
をそへたるも四段の活れ第四の音とおなじくあるその結びなく
うくはてにをはをおなじ但しあるもじをそへて切れることを結と活ぐ
くあやまてにをはをかねてる八後の活ずなりにてめるく八萬葉集十に春
野乃うきぎ活らで兼良恩文古今集に於ても見えぬ六帖六に
松ぞそのさきに似たき後撰集よりまたく見えたる人をあらし那

凡まうらるてにを
ちかなの如い加の係
あるべし

經若あよるの向
にい文字なるべし

△
土佐日記の詞を證据
因となれば八春海道
の引證せらるゝ清陰
詞花源氏物語等に説り
て加への仮字れ続ける
の且等今此說世に於心
殆なり

古佐日記に仮名に第二の音いきしひみゐより切て詞をうつる
てにをはに用ひたりるのかうて多し
○中二段の活八あいうの三行ありてなし中二の音きちひみゐ八
これを四段乃それ乃第一の音と二の音との活とかねて用言へ統ぶ
くこと紫なり受るてにをはを二つきられ用ひたる中一段乃活と同じ
第三の音くつふむゆるう八四段のそれをきれ第三の音のきは詞のうへ
にてうくるてにをはもその切てかくの如く是らも然らしやそもそ
なじくを用ふれあてまさられ音にあるもじをそへたる八四段のそれさかれ乃
第三の音れ体言へ続く言葉のかくしてうくるてにをはをそへその外さ
と用ひてかなすでにをよりおやおもきされもじをそへたるちゞ四段

の活乃才四の言乃活を行ずゝこれ結びゆくうるてふをうも
そなりこゝなり
○下二段乃活八十行あやぐくゆる第三れ言うくそつぬふむゆる
うハ四段のたゝきれ才三の音れ切れることや紫乃えくうふれかつふて文
るくふをえもそれくさをもちる和楽まこれ音ふほゆどをへていた
る八四段のえゝきれ才三の言の神言八段ぐく詔のかたてうるてふ
さえひそれくされてをうるなりまこもめじをへた行八四段
乃えゝきれ才四の音や和ずゝくそのむまびちや紫えそうく
活てをそそくれふあるト才四の言えけせてねへめえを云八四
段のえたゝきれ才一の言や才二の言をかゆくれえへ段ぐく何えて

うくるてにをそのうくりをゆくゆふる事一段の活乃いきにひ
みわ中二段の活のきらひみゆをねと行ず
○さて以くうくるてふをゝ段図ずにをゆてゆゆくゝきまぐ
いくるとを盃のくゝやくれもふ人をある儀八活でをべてうくれてにを
はをゝ乃ずくく横ふをほゆくくをこゝをたゞふくゝたくいくたゞくく
活ゝ四種の活河をゆくちゝ言ゝをくうくるてふをは紙もてをゆれ
ゞ肝要なれちよくゆきゆ人ちりむゆたりあをそをゝをでゆめ賞
きれてゝをえを第一の言がさたえまらゝうくれ八四段のゝ
られくゝゆやゝちゝべく第二乃言いきちふひみゆねゝうくふ八段
乃えたゝきてゝ紫中二段の活てゝ紫ゝちゝべく才四れ言えけせてねへ

発えを云よりうくるハ下二段の活用やちうなきなりうこのかもそべて
右のこゝうくれてふをそにようてそれをいきげれちゝあり
そハるるてをそれこをつへる有く又系をよくいてちゝべ
○続く用そのやいれ結びわくこれゝの辞（エフ）上ふあるやきハ切
て下へつづいげるなり四段のえたゝきれ才三のまくをつふむるハ切る
ちゝ系をいげるく詞をかあくゆく　れもふわゝれあゝつひゝくきれ
しゝまゝゆくふ　れもぶ人わゝれ川あくつひて行きをれあ
一段のえゝれを才二れ音いきれひみおゝほもゝとをへてこゝる
切用こを系をいげるくこゝ系をりゝくきる見（着）るあゝつひてき
き用もゝ又きち衣ゝれ花あゝつひて行くゝ系をもるあり

中二段の活き下二段の活ハ四段のえたゝきれ才三乃音うくをつぬ
ふむゆるりなゝうをぐこふ（戀）あくなゝ（明）れとあゝいひてハ切るゝこむ
みて行ゝうゝれをゝる月ハ（過）ふるゝ活（流）あくれ表なゝれあく水なゝを
ゆをゝをへていをゝれをきをゝ行ゝかゝれなり系をて続くゝ系く
つふハ辞言ハ行ゝくをゝふあをなゝ用言ハれゝくゝゝれも別
あくをちくゝち用ををてハ行ゝく詞をハいをゝれるなり用言ハ行ゝく
ゝをゝをハまゝ四段乃活一段乃活中二段の活あくハ才二の音いきちち
ふひみいをわよゆきかふ　れもふれあまを　さなれゝれをゝもおき
あゝれ　うゝみわゝぶなをつひ下二段乃えたゝきかてゝ才四段音え
けせてねへめえを云よをうけをり　きを奉るなゝ先面るをゝつハ

みに用ゐへだてけたるなり
○世にいはゆる下知の詞は四段の活にくは第四の音けせてへめれを
そのまゝにてさけ（咲）わたせ（渡）おもへ（思）なせいひてまたち下知の詞ともなれ
を一段の活なくは第二の音いきにひみおになどをそへて拾遺集に
やくまみそえの衣きよ君古今集よ山のさくらをあくまでかゝる
見よ蜻蛉日記にをちはには玉ぬよもとらうむすびしくのおぼくいひ中二
段の活なきも第二の音きちひみいゐにぬよよすなどをそへて古今集
よ忘れひとをせはよにといひ飛し あき風雲のかよひぢ吹とぢ。
よ吹風をなきそうらみよう陀か抱塔蔵開よまちねまるまざく松ぼよ
ひ見松拾遺集よひくらしはくれしきものをこゝろよもやおぼいひ　下

二段の活は第四の音えけせてねへめえゑおによもじをそへて古
今集よ人よそ移ぎよあらね咲やぶよ拾遺集にあちぬかぞにはひ
おほせよくなく佳さ降くりかまめよ千代乃なみくる　古今集にわ摂らる
をし風よゆきてうし見ゆ　万葉集よきなふやよ見余　古今集に
をひまつあれよ枝はどおやをなどありてこの三種乃活よはかくよもじ
をそへぐれは下知乃詞とは移るな祭ただしふるくは下二段のをそを
らき詞よはよ文字をそへぞ古事記下巻哥に加理許母能美陀礼婆
美陀礼續紀宣命におかくおもひそうかるこゝも止等の字たゞさ萬
葉集二よゆ終ろもぬ國平治跡同ろよたぶ率ゆさうくあやうち思
良之米同十七よ阿比見之米等曾同十八よおくくおきをもちれく之

按に隆臣云うひまつく
りよ附可ふかくことら
やおきたて下表羅行四段
よまつまうと出して下
二段に不出いいうど
義云ものゝの詞四段
なれ下二段よも活きそ
下二段の方に級令は松
あどのうつうにまつは
袖る方あり四段の方は
鶴の方よう松あどふを
ひまつゐるふて袖る是
こ自他の差ひあり古今
集のをひまつのれよは
その差ふ直に下知する
方あれば即ち四段の活

さりてらこの下二段の活の例ヨ引けるハ違れるなり

米多底人のまちかたく　同十九ニ馬志ぬし停息俳足不敢不都
止米毛呂毛呂乃咒も清く大神宮儀式帳ニ國津罪云々犯過
人ニ云く被清止定給支東遊風俗ニ古本ニ与世波与勢与曾不流
比止能ニ久可良難久ニなどもりて今の世にハことたくなねる
ちもれどいにしへの一格なり古今集乃ころころこれらハこの例をさく
見わくるぞただ順集ニ見ゆるひまるきみおもし乃理ニハれ
はあちそこやくまヨ意とりるれとあり一段乃活用中二段の活
ころぎかハ此例ハいにしへなるもし
○活詞を辭言にいくるとをおかしきハ四段乃活一段の活中二段の
活さいしまも才二の音いきしちにひみいりをおさて四段の活を方

保孝ヌ「拾遺集に」いあちをだにかかすなりと冊るべし

集ニきみるゆきけなかく　ある案ぬ後撰集ニおやくぞれとねなかんしに
おいでひせヨ拾遺集ニいのちをバあふにかへてもありなんといひ一段乃そをそろ
きハ古今集ニ志ぬみながくいのちのかぎりにゆる音云くまさたくぬ乃そをそうも
おそしほえふくによなぜいひ中二段乃活を拾遺集ニこそしおひ乃
杉ハ七日ニなつちにきこ案古今集ニけふだしぬらいのやちうだあぜい
ひらへ辭言とし下二段乃活ハ第四の音えけせてねへめえれゑニ
て拾遺集ニ道さゆさげヨたちえかくしり古今集ニいのちまだくわが
身志くも之ニきぬ又ころろがへ未熱のふてがなどいひく辭言せ
あることきまずなり然かく辞云ニいくるこそいとあまりしきて四段の活
一段の活中二段の活乃才二乃音ハ下二段の活の第四の音とはすらき

[illegible]

おなじきことわりにて なほ例を見てもしるべし

○四段の活の第一の音かさたはまらより ゆくの如き辞 ゆかなむ ゆかねとうねなどいふにつゞけ第二の音きしちひみりより ゆき なばやなど ゆき給へ ゆきなむなどつゞけるをなべて給ひおなじことなれども それぞれはおのれの音にかよひて云がたれあり一段の ここに中二段の活は第二のいきしちにひみいりをおよびきあはせ(着) み(見) みな見ねみぬなどといひて右のやうにかて下二段の活は第四のえ けせてねへめえれゑより うけ(受)なむ よせ(寄)なむ うけ給ひ よせ給ひなどいひてなほ少しもおなじことはなり 前段の例のごとく おのおのその言きはめちがひあり 右の如き辞 給ふ云八本などぞおなじ

こゝに集めたるうへにてはそれぞれのところに八の衢をわけて図にしるしたるにてはそのわけは四段の事をいへば第一の音よりうくるとは第二の音よりうくるにて第三の音は切るゝ所にて 言葉より受くるとまた続く詞より続く所と第四は言より続くる也 ありそのおのおの全くして他にまじらず混ずることなきなり

○中二段の活の第三の音にはもじを添へたる くる ひる いる おる ゆる くるを係言には第二の言にうつして きれ ちれ ひれ みれ いれ おれ おきれといへるも おくる(起)を おきれ おちるを おちれ うぐるを うらみるなどいへるがごとし 又下二段の活のをはりの第三の言にる文字をそへて いふ うる くる もる つる める ゆる ふる うると係言には

半四段音ユウ新しく えるけるせるてる祢へるめらえるまる
ゑるやいふゆけさ寒ゆく 愛るをうけるやもるとゆせるまける
ををそるやいふごゆしー 瘦 択下小世せる寒乃有こかてもこに片假字
をはきてけをはを見こく新毎ー四段乃活一段の活中てかく俗云よ
うけるえこうれ年ー但ー四段の活河乃寒一乃音かさたえ西らより
むめてふをはをうこるかゆ俗言ユウ毎ることゆうけうえハを寒一乃言と
むりこにをえ成あえせく寒五乃言こそとほもろをつうゆうゆう寒
をゆこかさ乙むをかさえそまこ乙むをまやいを乙むをつかなどいふり
○四段の活乃寒四段言 けせてへめれよりらとる寒と活く寒うをハ
けをらむさけりをさけるけをれれすへらむれすへをおくるかもなを

かをうこ寒かをもうをかをもうをいをうをもおをこうこれを寒けくよ乃
さけるけをうこるかをうをなをを乙ゆくひをうのこと葉こて羅行の四
段の活ふハ乃をきを西ゆ受るてにをえるをよりうこる八四段の活
ふ金くれけーハ生でもらをよりうこるてふをえいさかこをゆて四段
乃をこ乙の活ふこを寒をえ去ゆこそハけをこ寒けをこ寒ばかををうくを
どをけこどけこまこ寒ばうくまゆくさみををばうけやをこふゆど
ハうつゆ生でけををそけを寒ぬなどをはうこべかこゆればゆうゆもられ
ふかをゆこくへてゆる倍ー一段の活中二段の活下二段の活ユハ四活ふー

阿行之圖 並受るてにをはの事

下二段活 得ウル	一段の活 射イル 鑄イル
え	い
ぞ ず ぬ まし	ぞ で ず ぬ まし
て たり けむ つる	て たり けむ つる
て き ぬべ ぬる	て き ぬべ ぬる
う	る
めり らん べき とも	めり らん べき とも
る	
かな まで など より	かな まで など より
れ	れ
ど や ども	ど や ども

○此行には四段の活中二段の活なし

○然れども射鑄得などの字をあつかふたるハそれ活詞の文字なることを図を見て其の活ぶりをあやしむべきためなり猶活ることぞハ次に出せり下の字乃方にも皆あるなり

便蒙云詞通路中卅四
射ハ也行一段の活
詞として出せり
かくてはあるべし

○此一段の活ハ此行のいのみ也行のいの字定めがたけれどまづ志ばらくここに出しおきぬ猶其あらためをまつべきよしを見て行ちがひあるまじく考ふべし

一段の活詞

いる 射　いる 鑄

○此詞を八て一音のみ也ばいるといふのみにして其外の行も皆あり
此ノうるを係えふ八えるさ例なりと

下二段の活詞

うる 得　こころうる 心得

○これはうるといふ字あれども其つかふ一の例乃ごとくにあり
たとへば此ふ出せり二の例にならふべし

萬葉集巻廿 九二 あいかものあすいのかからにとしはさーあれいはんー あかねさす理々恐所 千載秋下 法師 もしらられかりそく秋のーまさめしーくもあるかせの むくらふる 堀百首 萩の枝はまさしく秋をせやーすすもーのうらられりそー 拾遺 はるかぜ はるかぜ 拾遺 秋 しらつきもかー 玄々 例かり

加行之圖 並ちりてふをはの系

四段の活	飽 吹	着	起 過	來
	か	き	き	こ
	まむぬトでど	まむぬトでど	まむぬトでど	きむぬトでど
	き			き
	しるけむおきて	しるけむおきて	しるけむおきて	しるけむおきて
	く	く	く	く
	ごぎらやゃ	ごぎらと	ごきらと	ごきらと
		る	る	る
	かなまで	かなまで	かなまで	かなまで
	け	れ	れ	れ
	げぎなや	げぎなと	げきなと	げきなと
				を

一段の活

中二段活

変格の活

○変格の活かくるそ来 ものかるそ何のそ ものかるそ活ざ四うるそ

とくるそ 呆れくー但ー 去ろうるそをうるそ八きー

きーるそどきるそ 格るそ ばるそ ばるそ ばるそ

○ こーかるそ ごーるそ ごーるそ ごーるそ

くくくくこそこれのみ中く外ニ例あり ゆくそ下かのくをみへこ

このくるる例あり

四段乃活詞

あく 飽

あく 明

○あかちまくる上

あがく 騒

あざむく 欺

○十五

あぐやぐ
あるく 歩
いそぐ 勤
いたく 嘶 歩
うえたく 主宰
うたく
わたく 置
わよぐ 游
かぐや 耀
かづく 被、潜
わかく 仰、扇
いだく 抱
いたく
うたく
うなぐ
わかく 驚
かく 書、播
かく 炊
かづく 髮
あく 喘
いそぐ
いたく 戴
うく 浮
うたぐ 薄
うたづく 點頭
わだめく
かく 卑
かづく 傳
かひろぐ 船
いそぐ 急
いたく 齋
うごく 動
うたふく 靖
うなく 呻
おもむく 趣
かく 嗅
かたぶく 傾
かわく 乾

きく 聞
くぐく 潜
けさやぐ
こく
ちく 咲
ちくぐ
ちく 若
ちのぐ 凌
ちく 食
ちぐく 濯
ちく
きちく
くだく 碎
こく
ちく 裂
ちやぐ 騷
ちぞく 退
ちえぶく 吱
ちく 透
ちよく 集
ちぐ 刈
きぢく 築
くぢろぐ
こぐ 漕
ちく 私語
ちこやぐ 爽
ちだく
ちぬく
ちく 好
ちみや
ちぐ 滌
きぢく 晃
くぶく 説
ころく
ちや 同上
ちく 數
ちぐく
ちぢぞく 退
ちく 淮
せく 塞
ちめく

陸居云せめぐ 古今雜上
おりぬとて ちぐらう
わがぎもちらさけ
んえい
毛物圖 新撰字鏡

[illegible]百十六
[illegible]甘[illegible]
[illegible]

そぐろく　そわやぐく　そむく 背　そよぐ 戰
そよめく　たく　たぐ　たぐろく
たたく 叩　たたびく　たひらぐ 平　たたやぐ
たく 突　たく 附　たぐく 繼　たく
たぐく 續　たたぐ 繫　たたづく 躓　たぬく 貫
やらく　やく 解　やぐく 遂　やきめく
やぐく　やぐろく　やよぐ 轟
やよめく　やろく　やろく 泣　やよく
なげく 歎　なびく 靡　なく 和　なく
ぬく 抜　ぬぐ 脱　ぬりづく 塗突　ぬく 祈祈

[illegible]云間よく続古今抄
上樣大納言家歌[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

のく　のぞく 除　のぐく　たく 吐　たく 掃履
たぐ 剝　たぐく　たぐく　たぶく 省
たれく　ひく 引　ひざまづく 跪　ひく 拉　ひく
ひく　ひく 響　ひぐく　ひらく 開
ひく 閃　ひろめく　ふく 吹　ふく 拭
ふさぐ 塞　ふせぐ 防　ふづく　ふぐく
ほぐく 祝　ほぎく　ほのめく　ほく 卷
ほく 時　ほぐ 見　ほくく　ほどろく
ほく 祈 招　みがく 研　みどろく　みそぐ
みちびく 導　みたぐ　みぢく　むく 向

とくろ下二段なり下文可合

孫孝云萬葉七赤駒ヲカカ可久激とあり

むぐく　抱
やたゝぐ　和
ゆく　行
わく　湧
をく
わなゝく　戦慄
をぢゝく

をぐ
ゆく
わく
をく
をぐ

をぞく
ゆるぐ
ゆるぐ
ゆるぐ
ゆるぐ
ゆるぐ

やく　焼
ゆるぐ
わかやぐ
をく
ゆるぐ　微笑

○右ハ拳たる句乃既ニ○乃ヲとつをるもを句の活乃證さ下ハひるもつ一なり下みなゆふ

○右に如なること葉の外何ゆゑこゝにるこゝだ多かるべ

こなゝもて一なり

○あがく　新撰字鏡ハ疏阿加久とあり

○あざやぐ　源氏物語寄生ハ「ぎやぐ」そ「えゝ」ぐ有り

○あくぐ　萬葉集三ハ阿倍すつゝくぐゆけバ和名抄ハ

喘息安倍岐枕草紙ハ老たるもの「くゝ」たらくあくぎけり

くえくまくあくぎまぐひなぐつくと

○あゆぐ　拾遺集物名ハ果ぢゆぐとりてつるハ千載集秋

ハあゆぐ　茅紫ハ中あゆ

○いく　六帖四ハつける日の えくうぢ和泉條使ハ「くまれ

これめ」　拾遺集別ハ「くゝ」紫同意ニハ「くぐ」やさけ　後拾

遺集意ハいかひ「ぐ」ゝ　枕ハ「むゝ」ふ源氏物語桐壺ハ「ゆ」ゆ「き」ハいのち

なりけり手習巻ハけてゆ「ぐ」ゝ　ゆ「き」もあるべきや　伊勢集上

○やちまたく上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○うなばく　此れも俗にうなばくやあり

○かづ〳〵　万葉十八ホともき可豆良伎十九ホ蘰可牟まさ
可豆良久ハ　山ちさ日うげ可豆良家流　和名抄ホ　鬘

○かひろく　和名抄ホ　舩　加比路　久注ホ　船不安也

乃〳〵〳〵きこ〳〵　紫乃〳〵〳〵

○きまめく　枕草紙ホ　先くるゆふのやてやあも

○きらく　うの門ホ　相俗後蔭ホ　きら〳〵　光きてこつ

○くく　古事記上ホ　わたかまさら久岐斯子也　万葉集
十七ホ　彩このもの多知久吉十九ホ立久久等　ちつやにちら〳〵す

○くつろく　ほ氏みとづくしホ　くつろぐこころもけうくれど

若菜ホ冠乃ひろふをこ〳〵くつろぐなるまさ　枕草紙ホ　つ
ろぎてなどつろく

○くやしく　住吉物語ホ　うらぶれ　支本集ヱぬるこ　ぐ
くきつるかれなどあり

○けさやぐ　源氏ホ　けさ　ぎてまゐぬこ

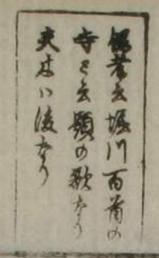
○ころく　和名抄ホ　嘶　咽　古路々久　ものこ

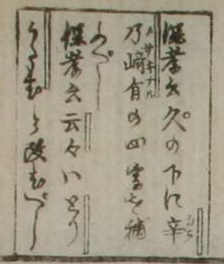
○さゝやく　後撰集ヱ　こてけやき　バこ

○しりく　万紫ヱ言　佐敝久

○ちぐく　古今集ホ　ちぐこ

ゆさ丹後守為忠家百首ホ　仲正　くれバむまのるこ





かたぐるまてこそ〻〻かたり

○ちぢく　萬葉十九に底ひこみ之都久ゝとも催馬樂に江の波為尓之良太万之津久也云々古今集に水のわたるまづ〻花の父ちやうにてなぞ行ら

○ちく　うつほ物語あて宮に玉の木ちぢ実ちの枝をきれてそこ又ふるちつりく打ちみくゆしてもれいもてふ〻あり

ちく源氏若紫よりはるばるさしのぼりてちかせたくまつれ金槐集連歌に春の田ふもきつもあぢきたきちれかのこふくちに水とゐまぐやなしもつま

○ちみやく　新撰字鏡に悦悍惶遽也於地加志古弥須弥

○ちく　古事記下巻に〻〻曽岐ちうこそけう

○ちめく　拾草紙にくつの木やちそうきとけう

○ちぐ〻〻　文木集に蓋家ちろきりるふのちのまち

○ちぐ〻〻　保氏賢木巻に〻〻ちを不ぢれて

○たく　萬葉二に多氣ちめも多香根に長き九に加に多久ちぐ〻十に手すちくうちをちるくゝにあり又十四に八多具ちも十九に馬太伎ゆちで中あれに杉あ〻ちこ

○ちぐ〻〻　保ハ多ちあり

○たさやぐ　源氏総角に たさやぎぬべきこゝあり

○ゆゝく　萬葉十六ホ石もちて都追伎布づりせあり

○ゆゝく　古事記上巻ホそこに都羅々玖

○せつぐ　和名抄ホ止豆木乎之問止里又祝詞に嫁継給

○せづく　重之集に そのこゝやゝ物ゝとづく呼揺もこゝろ

○せよぐ　日本紀に鳴呼騰動誼言誼譁かでくを志ろこゝ之比

○ゆろく　古事記上巻ホこゝだが毛斗呂々岐呂こゝ乃呂

○ろくぐ　古事記下巻ホ必自跛世字鏡ホ驥足奈ヲ久馬又

和名抄に蹇訓阿之奈閉此間云那閉久まと牧玲ロ記三ホ

ろくゝ　ゝこゝあぐあり

○のく　堀川二郎百首に ゆくぐろ　ゝこゝ　ゝたゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○ゝ　ゝ　万葉十四ホ波自伎ゝ

○たゝく　半夜物語ホみホ口乃てたゝくあり

○ゝゝく　蜻蛉日記三ホ物ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　

義云 ちぶ うれい 下
二條の活あり

日記よりたゞひ
○ひろめく 枕草紙よりひろめよてとあり
○ふぼく 日本紀ふ恚恨 哭恚怨なゞとよめり
○ふぐく 精蛉日記ふ兩所つゝ〻ふぐくやあり
丈木集ふ
○ほざく 日本紀神代巻ふ神祝 祝之ゆよりあり
○まくゝく 古事記中巻ふ枕 其后之御膝 萬葉集五ふ
人のひぎのくわぐ摩久良可武ゆあり
○まぐろく 字鏡ふ瞋目數動貞万志呂久とあり
○みそぐ 万葉三ふ潔身而麻之乎 俗松中物言ゆあり

有ゝこゝ
○みぢく 万葉十八ゆうゝゆるゞ美都久ゆあり
ゆう弥豆伎ゆ月次とゆうも同言なれべし
○ゆゝぐ 万葉二十ふ由良久ゆとあり
○ゆるぐ 住吉物語ふゆつぎ結つまゝ枕草紙ふゆるぎゆう
きなれをゝくなゞくゆあり
○よく 後撰集秋ふ宿とよぶ賀之集ふ
ゆゝき狀乃秋の月又よりどゞゆうゝし 真仰集ふ狀とよ仏む
元真集にものれゆふやゞの萩乃葉はよけ 精蛉日記ふこひき
道ハよりかゝくに狭衣三ふよりかれなゆ月ゆはやゆ四

○やちまゝとよ

ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ　ひきよ數わざ

那丹波守為忠家百首に仲正ちかもとの歌ばかりむかし

よくほどになりぬるもそこの詞ハ行の中二段おもほゆ

きて云全くおなじけれとハかく例をあまくいとせれなり

○わやぐ　松浦宮物語わやぐ

○ゑなぐ　字鏡に噪出氣息呻吟也　惠奈久

○をく　万葉十七に呼久とかくれバ拾遺集物名

よくたれぞ　○をきゑしぞ　ゑくなぐ

○を先く　松浦宮物語をちけバ也あり

○万葉三に見毛左可受伎濃十四つ〻波可馬可毛あるハ

全くこれとおなじきこゝ樂の詞ハ行ばかりよい外に活きたる

例もなく又わくくく　ゆくくく　詞のたくにもゆくくくこれハ

詞のたくにもゆくくくこの詞ハ此ハ下二段のたくれるも

ハなとさかぞきぬつゝもけ先のをこうぐき例ありまぐて

ぞもの下にをこ成ぎ一のまよりうくハ四段の活中四れ音

ゆくくハ下二段の活なるゆ上るもつぐ

一段の活詞

さる
着

○やちまた上

中二段の活詞　こゆるゝと活ゆ上八ゆるゝと下問あり

ぬくる　生　　むくる　起　　すぐる　過　　ぬぐる

○いくる　拾遺日記一に高砂はしたくとはくるくそいくるくき
やとあるのみかてこゆる活ゆるハ見あたらぬ故にこゆる
四段にて活ゆて於ゆ〜えおゆ〜えゆ〜にゆる

○なくる　万葉四ホ十八こゑハ奈木（なぎ）六かゝ十七こゑ
きゝなくて奈具流ゆも〜〜又十九ホ二ろ奈擬年（なぞ）
ゆゝ思て末二乃音より むかてにまねぶゆゝれを中二段
の活ゆゝ段の例ゆゝて比内を四段ゆゝきて云ハけあるべし

○やちまゝ上　○二十五

○よくる　万葉九ホ二ろ乃見の興久列〜われをもて十あよ
なゝ月〜に興久流日もあ〜ゝ古今集春ホこの一もゝを
ゆゝよやつゝ比ぬ恵集ゆ芳蕗をゆゝ比ぬ恵ゆ
筆宴ゆ宴ぬを見ぬぐき人ハゆゝれぬをゆゝれ枝ゝ内で
ゆきなゝ愛かく活ゆゝ乃かゝを才二乃音ゆゝうゝれハゝ
ぬてゝゝきゝ乃指あり　源氏竹川ゆむゆきゝ流まあを活ゆ又
ゆゝぬなゝぬのゝ人を活ハ今撰和歌集ホゝみてをゝ比ゝき
かゝやまゝゝ愛を活ゝ比ゝゝれものホゝあをけるなゝあ
比内も四段ホゝゝゝけをゝゝにゝゝゝぬ

下二段の活詞

此るを俗言よいけるこゝの例なり

あぐる 明　あぐる 上　あぐる 預　あぐる

いゝる　うゝる 受　いゝる 頂　たもむる 趣

かゝる 掛　かゝる 掲　かゝる 懸　かゝる

かゝる　くゝる 碎　ける 避　ける

けゝる 捧　けゝる 授　けゝる 妨　けゝる 退

さゝる　さゝる　さゝる　さゝる

たゝる 背　たゝる 闌　たゝる 助　たゝる 蟠

たゝる 平　たむる 手向　たる 附　たる 告

ぬる 続　やる 解　やる 遂　なる 投

ぬる 抜　ぬる 祈

ぬる 懐　ぬる 逃　ぬる 去　ぬる

ひる　ひる 開　ひる 広　ひる 恥

ほる　ほる　ほる 廣　ほる

まる　まる 負　まる 曲　まる

やる　やる 和　やる 分　やる

わる

○あるる 古事記中巻に逃散日本紀神代巻に散去又廿六に散卒などゝ

○いるる 源氏繪合おいまけるる栄花あるるうの

やく藤壺にいるる方たるもをなくあるあ

○うゝぐる　古事記中巻ふ杉やみくふ宇羅宣て又下巻ふ
そあり又うゝぐゝて詞そあま

○かゞくる　古事記下巻に姿體痩萎云々　源氏物語ふ
かゞけたる云ゝ　堀川次第百首よりゝ　ばかるひつゞれう
けつゝえゝたゝゝ

○かゐくる　日本紀皇極巻ふ感をかゝけゝるゝ　続日本紀
宣命ふ感天又万葉十六にちゝけこゝや蚊間毛而をゝむなど
のゝあるゝてかゐくるゝ

○さぐる　拾遺神楽哥ふさげゝ　きて催馬楽ふゝや人乃
ぢぐるふくろをゝとかゞけて

○ちゝくる　うちかけ　源國讓乃宝にかゝ屋乃おやくちゝ
くれハ忠見集よりたゞくかみのちゝくふまぐに

○ちゝぐる　うゝかゐ物語次上の巻上ふよりちゝげだりえし
金槐集九ふよりふちゝがゐるあまやなどあ案

○ちぐる　古今集初ふに波のをちげて風ぐひきまる六
帖五の下ふすげてひくゝあり花菜流ふれなどの法ちげさを

○ちくる　源氏野分ふちゝげたるちぐちぐもうゝ御ぐれう
一数ま寄歌集に雪ゝえぬゝぐれゝよりハよりゝそにうつ
くゝちにそちゝけげるちを　丹後守為忠家百首ふ雪きゝえ
ぬゝ雪ゝかゝゝそのちゝくふをゝくちみぐ風乃きゝりかうき案

考ふ六帖五の下
のの下の二字ハ
ゞ一祭の頼の哥ん
仮書ふ寄歌ハ巻数
ゝかくゞ一下ゐ

○のくる　行方知ぬ遠くはなれてこもあり

○くぐる　萬葉集ニかつ〳〵をらま波氣まくらゝ作笛わざをゝこなぐあり

○ふくる　うゝかゝ知ぬ後後下ふきこゝをたゝる花こあり

狂源氏もあかつゝにたり

○ひゝくる　源氏あがゆゝにむかをひゝけて杉やゆ狭衣二よむねもひゝ方ゝるかあり

○ひたゝくる　源氏源氏にひたけゝこゝもたゝひゝ又菖蒲

おけまりひたきてゝおもゝげあきハ栄花ものゝり初花ふ

内乃ゝ使えひゝけゝゆゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て第二段目よりてと変るいろはにぐやく四段の活用中二段の活
用のみを四段のもとにきたすべこげこげこぜおしいと例
あれをはいて歩くもたつもそこぎぞこぎこぎこげれあし
はつてこれをけまばはさしく中二段のもとにきこ中段と打て
これをてゞ外にこびるこげれなどと活用するこゝ又この
外に中二段の活用にてなるべはもぢでしく社できおくし
○変格の活用こゝ系はしよせう活ざ用変るてとをこなつぢ
ぶのしし但し志志うなつぢにそこ活変るはもよりうる
格あるをさいしべ。せし。せがあぐせうのこうしをおさい
矣なりもぢでしく系に知きなてにをこいよこしをつこ

あつふかりして相もしろこと侍しくこゝきと右のごやしく志
志ろけてふをそのこ池ふう活変を 加 行の変格あをこの
てにをを活ゝあぐふしく見ひたるなどをべて 加 行の変格
ところの変格こうく仰ぎもこゝあれはなぎ四の音おてこきこゝろ
と 加 行あるはなのちふ活ゝろはく異てそが八全くわあ
けてゝ知わはせよよりをそへてせよこの例なり

四段の活詞

あうを		あくてづくを	
明			
あしを		あうを 餘	
あそぶを		あこをを	
遊			
あひを 浴		あやを	

○やちまこと上

○あゆぐる
いつる 致
うつす 移、寫
うるほす 濕
わくかる 後
わぐろかる 驚
わがる 思
○わよぼる 及
かぐる 插頭
○かよる 通
あらる 顯
いぢる 出
うつろる 移
わる 押
わこる 起
○わびやる
わがる 溺
わる 下
○かる
かる 枯
いそがる 急
うがる 動
○うらがる
わる 後
○わこる 威
○わろる 生
わるしほる 召
かくる 隱
かこる 返
○きる 聞
いる 生
いぢる 御座
○うらがる 促
わる 犯
わとる 落
○わびやる 刧
わるほる 思
かる 貸
かる 替
○かるる 乾
きる 崩
くだる 下
○くゆる
くろる
こる 越
こがる 焦
○くぼる 覆
ころる 殺
さがる 諭
さる 醒
志る 示
すぐる 過
○やちまた上

きる 崩
くだる 下
○くゆる
くろる
こる 越
こがる 焦
○くぼる 覆
ころる 殺
さがる 諭
さる 醒
志る 示
すぐる 過
○やちまた上
○さる 消
くだる 崩
くる 暮
○くゆる
ける 消
くろる 志
○こる
○こやる 伏
○さがる 捜
さる 曝
○まる 知食
する 澄
○さる 曝
くだる 覆
○くゆる
ける 汚
○こる
○くる 凝
○さぐる
○まる
○すかる 賺
する 濟

後拾遺 若菜下 四十七

後拾遺 今丹黄葉 夫 丹織之 遊衣

後拾遺 ふの作り 沂須良年。

後拾遺 拾児之 哭別取委物を之 無者を

後拾遺 路上呼 猶あり

後拾遺 くのすれ帰水 らのぬ

後拾遺 おすきの歌

そを　そなう　たぐを　たふを　たてまつるを　たくを　たくを　たく

をわぐさを 戻　をぐろかを 廻　をぐやを 崩、燃
をろうほを 催　をろを 漏　やかを　やどを 宿
やくを 和　ゆらかを 動　ゆれぐを 動
よろを 讒　よちを 依　わらを 沸　わたを 渡
ゑすを 醉　をを 食　をやを

○あくがを 精怜日記ふかくのこあくがしまろハ源氏若菜ふ巻をさをあるあくがきさをあこがるるや 散木寄奇集ふしろをそにあくがるる十載集春ふあくがしられなあくがる

○あくを 鎮火祭祝詞にあくをひつとやうとあるを

○あを 源氏玉蔓ふ於やあをれをあるまを萬葉ふもの人をもあをさをばをようををるををばの迦ろうたれらを紫なり

○あまれ 古事記下巻哥につくやたなかきつき阿麻斯云

○あひを 万葉十六にをひをを安年佐武中あり

○あやを うはかを拾遺後撰巻ふ血をさをはやしてまを梅花笠巻につまもやをり血をさをあをしてなどの哥

○あはゆを 拾遺集抱ふに於あはゆを千仏荒中れ蓋く又赤染衛門家集ふ女院の歌君やきこえをせをろいをならをれいをりををまあをはやをくををくをきれををくの歌

ゝ〜ぞこきひろふこゝろあり　ひゆがさでられあどうを

○いそがを　源氏桐壺ふいそがせバまこと源舟ふたゝいそがゝに
いそがゝ　いゝぶまこと　ありけてたのゞせくゝせをこそ四の音
ようでのてゝをゝ　ゝぶうのたるを四段の活ハまでに活るうへを
ゝ　何下二段の活ハつまゞ　ゝぶゝぶかのてゝこゝばなり何れ
のゝをゝうふをうゝ　ゝうこゝを已よゝをゝゝるうへをてゝるゝれバ
ゝをゝてゝきなるこゝをゝゝれゝるゝをゝうゝゝゝゝ
きれハたゝゝ小ゝゝゝゝ

○うれゞを　うれゞを　あ活なゞの村鳥の巻ゝたゝるゝをゝゝゝ
うれゞうゝゞ見てゝ恵巻ゝうゝ集ゝ物うふゝゝ

○うゝがを　出雲風土記に巣船而率巡八十島宇良加志給鞆云
○おゝゝを　古今集別ゝ人をんゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○れゞを　枕草紙ふうち孫ゝりてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俗考云脱たるべしと
あり

俗語云多武峯物語
長哥われや杉ゆと
又いうて杉ゆきん

○杉びやも 字鏡に慴又悚於比也須とあるこれのこたて外ホ
なるべしハ加の字ハ脱たるホハうべなるう

○杉びやうも 保氏本風におびやかしたきバこあも

○杉ホも 万葉十八ホまに於保之同二十ホあでに於保佐年
まこきみに於保世流六帖二又云よなで杉ゆしうに杉ゆ拙がと
むたづの村を出そよすでおわす 松のくやしにえこあで狂多
しりてうく杉ゆ杉わせるなどれてホ四の音ようるもきのてホ
をを成うるハ四段の活用ホかぎ終りの三種のたてきこと
をよハこの例なり

○杉ぞす うつほ物語後蔭巻ホ杉よぼそむとあも

○かたも 日本紀神代巻に鍛作新鈎云々三代実録十八に
改鏡益神宝為貞観永室常乃鑄銭司路遠効多ホ依天
加美之於山城国葛野郡天令鑄作えくくはそそうり

○かよそれ 後撰集に せうそこかうろ 俗うろに えく
又ひうぐだもかよるす 四つるふく えくきこちなぐうり人かよハ
さどえく 金柴集別にこみかよはさ 位より拙がたとうい
かうそれになど杉てだやしかくうそれかうなく
このうは 中ほぐホ第三乃まより下ハ段ばけうるハ四段の
活用の例と又ど むのてをそ成ホ一乃音よきうる段ハ四段
の活うそ柴なうくうそ ホをりそをちうぐきかうそれのごく

○やちまこと

くぐくーきまでつくるハこの詞は行乃下二段の活よりかはす

かよそそはるかよそそはるかよそそはるか

くゝくゝ屋かゝてえくやあり

○くゝほと　古事記中巻歌ふ本岐玖流本斯とあるこの
くゝたゝきなるべし

○くゝまと　神賀詞につゞく黒益之云こ栄花物語むのか
ごやくゝ出くゝまとあり

○こなを　うゝほ物語後巻に本をこやこなをせこゝ
ほこのくゝきなり

○こかりかを　枕草紙ふくあほりかしてきつゝを

○こやも　日本紀ふ許夜勢屢　万葉集ふうらなつゝ許夜
斯　仁万宗ふこれうれあまけて才四乃音より乃こゝをハ

とうくゝる八四仮のくゝきの俗なり

○こゝも　出雲国造神賀詞ふ下つ岩ふ凝しこあり

○さがも　うゝ物ふ物後たゝこその岩ふぬを人こゝけゝこゝ
てえこ　まこゝ茶の後乃岩ふのひさけけゝこゝを源氏中さ
ヒ木のまこゝさがゝ出つて　栄花ゝくゝ乃別ふさがけせけふ
枕草紙ふけがゝ物くゝ　紫式部日記にゝ見及古ひさこ
がゝえくなどええたり

○さもくゝ　狭衣四こさけくゝ物ひきをこゝを

○ちこゝゝも　源氏若菜ふちこゝかくけを

○もかも　丹後守為忠家百首仲正けくきゝれあゝ俗

義文さうされハ行下二段の活用

傳考文ケーさ千の
ゐれ活くさ考ま
ばらの活に今さ

がきれうくをたくゆ口伝をもつてあらぬ心ハこようなり源氏
幕末又たまうハまうたまうよりは伝聞をあやまれり
○ゆくを 源氏蓬生ふつきぐしのゆくもぐしてとつたう
○そを 源氏明石巻ふ酒をひそくなを行あり
○たでを 源氏若菜よりとさくのごひたでして
○たくハを 大祓詞に置足波志 万葉集十三にあ足ばらに
行くい足椅などこえたり
○ゆぶを 仲百姫語にまれをとつこゆぶさ今やあくまさ
赤染衛門家集ふむしのちとけずてゆはつまぶるもれて
いきのつるゆふたぐくをかくくむしのぬこ情とたよう

○ゆちまさを上

○てくを 萬葉十八ふ天良佐比とあるハてくを処なるく
○てくハを 宇鏡に術天良波須とうをまさ日本紀哥よひ
やてくふえくと 波 行の四段ゆまをてくかくゆ
○なを 古事記上巻歌ふいを那佐年をまくハとくゆ那世
万葉二ふ枕をまくく奈世流ゆふこやをいく奈佐農久
十四ふつをくく奈佐祢十七よりをまくく奈須らむ妹を
○なやを 情怜に記ふさなやくるれ多をあくぬこりり
○なくくれ 行くぶこなくくれ人あぶ又これこあくくせ
やこくやあくれ行くくを又ゆを行くくこのこをを

こゝふあゞたる八は行の下二段をば活てまぎらはしきゆゑなり行をば下二段のごとくつゞく

○わほそを　万葉集に仁實播散麻思乎むやだれけ[illegible]これをなつゝそにれなどゞ下につゞく

○そもつを　古今集に[illegible]心をだにそもつ[illegible]

○そもつかも　源氏の巻にそゆつかるやあを

○そやを　催馬樂に藤を野ゆくちがくらをちかはやと

あゝ林もそれえ[illegible]

○そゝかを　古事記上巻に蹶散やあかこれあゝ

○そゝを　出雲國造神賀詞に意志波留志天之

○そゝを　祈年祭祝詞に見霧志坐いせあがりにむかしに

ゆるゝこしもらゝ

むもひとだあもそゝ

○ひゝを　古事記上巻に治養をひさゝまるさゝ

○ひゞを　延喜式神名記に[illegible]

又源氏物語に[illegible]

○ひやを　[illegible]

てゝひやゝ　情玲瓏記に馬も浦に引ゆくひやゝ

ゝ　皮木集安法[illegible]

きりひやゝ

○やちまと上

○ふるし、金葉集恵ふつうぶをを風のあらけちつきれを
こしまるるをもかやしらるるかふこあを
○ほころぶを源氏若菜上ひをほころぶこれを
○ほかを むらくぼ語ふほかほ 行上やこあう
○まぜかを うけぼ語藤原君のまそこしふまぜを
かかふるを 云こ
○まろぶを 狭衣二ふ雪まろぶすれこうま
○こやろかを 枕草紙ふ名くのこぬを案もふかか
たるこをを見えをを
○もやを 後撰集ふをけきれをもやをすは

忠集ふきけるもやせ名けかり
○やこ波 万葉集二ふらくやうこ人を和為跡まこ二十こ
夜波之おぬをよ名へを
○ゆるがを 蜻蛉日記ふひきゆれうそう狭衣物草舎に
はかせば云こまこひれゆるがしたれこゆくゆのゆふゆれ
がをを たぬをいの数を名ほあれかをあう
○ふこ千 古事記下巻ふ譬大日下王曰云こ字鏡に譬ふ
己須 萬葉集十二巻ふ人言之譬乎さして催馬樂葦恒おや
にまこうふこ〜ゆう〜かぬをあう
○ワくを 万葉集十六ふけちをうべふ湯和可世子ぶを こ

晴嶺ハ記ホ中ノ如ク不丹後ノ忠家百首ニ盗忠
ノ歌アリ百ノ中ニ
ろう邪などみえたり
○をやも 日本記欽明巻ニ毒害（ヨヤシコヒ）又仁徳巻ニ被蛇毒而（ヨヤシニヲサレテ）
○古くさくとき加す なが行をなげ〳〵まりをもて
たちをたく〳〵あひをあく〳〵かゝへをかゝせ行むを
ほすも 之をかまもをかゝをかゝ〳〵のれとのゝを
なやをこの四段のゝ〳〵に延へくゝ〳〵ゝ〳〵てサヤ
四段を今日出さびなほこのあゝ〳〵ゝをかゝ〳〵
又通〳〵さくゝの四段のゝ〳〵ゝきかのゝ〳〵ゝのゝ

ゝにゝゝゝ〳〵他（ホカ）の行ホ延ゝゝゝれホハゝくゝゝふゝゝた
ゝゝゝ例ホ〳〵ゝのゝゝゝゝくゝ八四段のゝゝゝ行ホかゝり
たゝゝ行ホ〳〵ゝのゝゝゝゝ八四段のゝゝゝゝ行ホかゝり
に立為者をたゝゝれば也ゝゝゝゝ

あるゆゑ万葉十一にこんぞ晩師之面のうるはを拾遺集につ
でもぐ〳〵むつかるゝ六帖にまた六ゐなつで〳〵ねぼ〳〵し
順集に雨〳〵めをとゞと君やゆく〳〵 兼盛集こゝろぼよ
乃山とれば〳〵ぼ〳〵ぼ光ゝ 重之集にたゞゆゑとかゝ月を
ハ門〳〵 清正集にいそのかゝむ〳〵ゆぼ〳〵 仲文集〳〵
今ハたゞかへ〳〵ゆ果をかぐらゑ 仲ゝもあがちゝ
ぼうゝ〳〵人ゝ云〳〵まとかゝうのほまゝてぐ〳〵 さゝ
ぼゝぼ〳〵ゝ〳〵人あり〳〵ゆてうけゆゑまがの流
の里にあやゝうゝ〳〵むとまく〳〵ゆば 同くたづの
む〳〵島と巻〳〵ゆみ〳〵あそぼ〳〵に同生にてまりぐりと

かゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

狩衣一の袂ふ二の袂ふを合わせ八回四の袂を合
ひさ形後てきゝを叫ぶしく乃ひさへなど牡ゝをゝ
らの志ゝをつゝ月ゝ世ゝをゝつゝ泣くれをゝ泣ゝ志ゝ
らびをのゆゝをゝ志ゝをゝ見ふ志れゝ志ゝ泣ゝ志ゝ
ゝも四段のゝゝゝき詞八オ二の音き志ゝひみりゝを志
れ志ゝをゝるゝぶゝ泣ゝなゝゝれゝゝふ引ゝゝ泣ゝれゝこの
乃乃袂のゝゝゝゝ泣ゝ泣ゝれゝ八オ二の音志ゝゝゝ泣ゝ志ゝゝ
つゝぎ門ゝ乃ゝ第四れゝえゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
る八下二段のゝゝゝき詞乃門ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の下二段ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

遊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

〈ちゝぶ毛バ丸ウ四ウ毛ハ行ウ毛ハ八ん下の例ニ乃さ毛ハ
よゝ見てこゝろ得おくべきこゝ毛ハ

変格の活詞

えむじる 怨	○おそれる 御座	○かれる	ぐる 具
けいする 啓	こうらんじる 御覽	さびる	○ちる 死
する 為	せいする 制	○たえる 絶	そする 奏
○ぢる 盡	ねむじる 念	ひる 干	○ちえる 生
○ふる 舊	ほつする 欲	めいじる 命	まひる 賄
ものする 物	ろんじる 論		

○亦茶碗の外なほ一ツ
なほ沢山ありぐあるけれども
の活用ハ甚外ハ爲ことをとくてつるが知ゝて一つ
の用のぢゝになるなり

○おそする　竹取物語の中ニ
おそしける　落窪物語ニ
にこそハおそしる　又盃におそ
ハおそ
おそ
おそ

○やちまた上

○四十四

八張アリ分ヒ一本ハ於くせどゞあるべんてのの例おそかもひてよ

○かれもれ　万葉集十六に拈為禮とあり

○もふもれ　後拾集物名にもれ　拾遺集意ふあるべし

いせむ又もれせれ　落くほふもにさ分ナキ只えたて

○たゝもる　万葉十四ふたもゝそひけぢ多延須禮とあり

きゝ清正集に泛やハたえるほゝぎすもとゞまり

○つきもる　源氏浪摩巻につきもべくも同格ハ此につきす

もゝ　栄花初花曽巳野もとつゝ八もゝ　演松中物語

初花ふけもれべくもこゝ　けゝもそ又もべて生ゞもつ　藤

ゝ切しゝ中紫ようるる例なり

萬葉十四ふ例ゝ　拾遺集意ふくひきゝめふもせざるゝ

○ふもれ

下二段の活詞

ふもるを格ゝよハせるしゝ以例ゝ　但ゝこの例ハ

あもる　○あもる　逢　○ふもる　座　○うもる　失

○わもる　越　○たもる　仰　○きもる　着　○きこもる　聞

きこえもる　○えもる　食　○ゝもる　御覧

○ゝもる　知　○ゝもる　住　○せさもる　為　○やゝもる　取

○たゝふもる　習　○ふもる　似　○ふほゝもる　香　○のもる　載

のたゝもる　宣　○もる　馳　○れもる　走　○ふもる　失

保孝云詞通路上卅八
[illegible]
[illegible]

○海ぢる 交
むすぼる 咽

○右ふ参たるかいまたる
むすぼる ふるまる
ーこまぐくハ世さぞさてられと今俗ふとハ行の四段の活ふ
いてどこれこそ活ふ四段ひまぐふべうしばしまた右の紀ふ流
さはる詞とだまうまうにをいくやそいまへし貴人ハ行のも
人とおもはせ抑ふすれハのはらたふらどふうはと
ふまうべしはてきれをまにてみるのうものしたまふを
ぬしやがくかくいるをおもはるまふさはるを今

○まかまる 仕
やせる 痩
みをる 見
ふまる 寄
こまぐくをる 参

宣孝卿大水十巻七百首
三条八位左大臣
[illegible]
ふる物を衣の衣を
はかりとせて抱をと
つあれ衣をまのん
られい織女の我衣
にわ見しと葉留を白
いれ衣かれい白い
そしらくきや
うあれしなるくき
りの者を衣れあ
らしあることれい
白をせの方ありと
しはめて

ひやさてそうみてのうあるさうきもるこいひ夜真ド
たまふを 真せさを浮ふこいひまさい愛ふのをれをを四段
きをふをるをるにはいはるをはやをたくひおかしーこな
これ活ふてそうみていくこをどあま古くいこめ行四段の活ふ
延ふふ行何ふをふて
○んて他ふ他ふいるハこの活ふ物を延をるは四行の四段の
活ふ 後拾遺春ふ 梅ふまをさくしに花をおほこをて柳ふ枝
ふはるせてーふ邪 源氏紅葉賀に手をかるてなくこをなぶく
しふく云くなをてるる後拾遺ふ梅の花ふ梅乃ふほひを
あーーふるといひ 源氏ふて 源氏乃巻の巻上に手紙とお

係孝云終せさすると云べきと山口栞に他例あり

ちゝめ給ふをつくゝそゝきに他よ終さするかゝる流れでこゝ
の活の用をもちひまる 古今集枕にめぢたる四々段ばかり
よ野辺をわけ給ふ 源氏紅葉賀にそこゝ君をなよゝうゝ
しやこなりゝそゝ ふにこゝろのゐてそゝぐもしなる儀しやぐある
八藤ゝゝ内の野ゝとるかゝすをつひ源氏の玉乃養上を終おゝ
ゝ給ふ故ゝ人ゝにて物を終まゝるゝをバ四段の活のつゝを用ひ
なるゐまゝ代差別ゝてまゝゐゝくゝゝゝずハたがひぬべし
四ゝ二段のふゝゝ段てまゝゝ段ゝ段なるたゝ単たる二のみ
なるゐ段ゝ段しゝそのゐよふをゝ段ゝあゝ段ゝこハ自他を
ひりゐてゐゝ段ゝはきこゝ五ゝ段ゝ自他のゐゝ葉のゝこゝを

別ふくはしくいふべし

○上ハ単なるゝ段乃中ハ四段乃四段ゝゝくゝくゝ
ゝゐゐゝゝゝしゝげゝるはその證を挙ゝ段せゝこのけぢめい
ゐ段ハ行ゝかなゝゐやゝゐゝたゝゝゝゝゝゝゝゝ今ハまだ
段ゝくゝてゝゝまわゐゝゝゝゝゝゝゝゝ

らをやハとゝミ落窪小男うそせじゑ　源氏箒木にうもるゝ
ミあゝせむの心なるれど又々新巻にも徒なをりを対ひ
あゝせバゝ　順集に恋なくかりごゝふあゝせバ信明
集に美なくばうゝ人をあもゝなゝなど枕草
枕草子この河あゝ乃ゝあゝさゝなど四段も活
くゞくあゝゝれど拙ゝたゝきゝれゝは一ゝもなゝられ
右のごゝくいゝゝこの源氏のうゝせゞもゆくゝきのゝをい
ふゝれバ四段の活ゝ柴乃かゝるゝハうゝゝさゝこゝ例あり
○いまゝら　いせ物語よかゝる道ハゝでうゝゝるゝとふをゝ
保拙かゝら後撰の歌にわゞよのゝまゝせゝかゝふハゝゝ　源氏

宇舟ふ右大将の宇活へいまゝるゝゝ枕草紙
ふまゝゝゝゝこゝちゝてかくわゝひいまゝれゞゝかゝふゞ
のたまゝゝゝ安法く師集にかゝの君のこのかゝゝれ
活ふこゝもゝちゞゝていゝゝゝゝ

わこもる男云々 伊勢物語にかきたるよてかゝることを人にと
ぜぜこれとやきていぬ蜻蛉日記にこれをそゝぐやうて又
きおあもれぜ 源氏榊にいせまぐたまこう打もひおこせむ
馬内侍集に御ものゝ文にこれをそゝぐまこあぜ 狂いと打ほ
こきゝを四段にはこゝかゝたれを一ゞもすゝ山人おこせバ又
をれこもれど 文おこもれぼあぐも四段の活用をゝゞ人おこさバ
又こをおこせぜこをふこれこせバといふゞ空まりゝ又むたもたる
などのてにをはを紋末四の音よりを受るを下二段の活用の例
○きかもる 万葉十八にきみおもふ勢年 後撰集に多ゝ
なれのゞゝ君にこゝせまこけぢに多をわきにこゝせよ

大和物語ふこゝをこゝせ 源氏箒木ふらきかゝゝ
これを打ゝゝ又かゝゝあゝくきゝむきゝぞきに
ぞはいえば
○くゝもる 拾遺集につゝふくゝせてきゝ西にたゝそゝとあ
ぢてまゝも四段の活用ふゞくゝそゝそゝふ例ゝくゝかく他
ふもゝちもるふにゝふもゝくゝんてゝふもくゝのゝゝゝき例ゝ
○もゝもれ 万葉二十ふ志良世年 古今集意にくゝきゝの
ゝ人にもゝもゝ拾遺集にゝきゝふもゝせず後拾遺集秋ふ志
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
源氏物語徳角に楊ゝそゝもゝもれ 枕草紙にゞ

○きつまる　源氏宿木ふうちまずまづくやまずまぜこはつ
孫よりはつ

○まかまる　古今集かふ行うぬこ染ふ海ゐせそそ〻すく　後
撰集ふ春さ〻紅をゆるまかせ　まこ風ふ何うまうせむ
又ふ風ふまかまる　源氏竹川よんひ〻ろにいかで海ゐまる
宗花抱清ふこかう〻れふまかるもこぢ花草ふ
もぢ〻こ〻張よ海ゐするあ兎ゐをあぐ松いを杉やこれを

まかさむ　まかさだ　まかさぞ　まかさ　えこやたぢけつべくもあも
○やちまこと上

○こ〻まる　竹元抱清ふあゆこやくまる馬をはら〻張
伊勢抱清ふ湖松こ〻水こ〻せなぶと云こなどいるを

○まびる　源氏宿木ふうちまずまづくやまずまぜこはつ
孫よりはつ

○まかまる　古今集かふ行うぬこ染ふ海ゐせそそ〻すく　後
撰集ふ春さ〻紅をゆるまかせ　まこ風ふ何うまうせむ
又ふ風ふまかまる　源氏竹川よんひ〻ろにいかで海ゐまる
宗花抱清ふこかう〻れふまかるもこぢ花草ふ
もぢ〻こ〻張よ海ゐするあ兎ゐをあぐ松いを杉やこれを

まかさむ　まかさだ　まかさぞ　まかさ　えこやたぢけつべくもあも
○やちまこと上

○五十終

○きつまる　源氏宿木ふうちまずまづくやまずまぜこはつ
孫よりはつ

○なつはまる　源氏紅葉賀ふてもむかきてあらせなど云こ
○ふわこまる　後拾遺集春に梅の香をけこ〻ふ梅ふほい
○せて柳が枝ふさかせて〻かふ　源氏玉菜ふ中ふ梅をえこ
いこれふわこせすくりあぐ海ゐ

後去夫木一鶯啼霧
山鶯啼尚少　大江千里
山ふかみ人ふるさと遠
けれどもたれいやふく
鶯の鶯のまれなる

4

それぞれ古の四段を活きたるこゝをひとつもなし
だまわせて和ぐ和わ
源氏物語のまに和そ
はさせ乃ぶ
りの下二段の未よいへるごとく
を伊麻勢豆とあるこゝを同じ

[illegible]れど[illegible]四段に活きたることをひとつもなし

○まわしもの　源氏桐壺にいそがまわしてやぐれば

○むもる　和名抄ふ哽咽無須　源氏[illegible]のあたりにおそれ

むせてこえもなくなどいとえなを

○古くまもなるなどゆるを活きせのたくまもたるあく

こと活用にいつもそのよう　加　ちの下二段の未にいつるごとき

しまく萬葉十五にひとくたに君を伊麻勢豆とあるを同じ

増補標註詞八衢上巻終